華嚴三性說の立場

山田亮賢

一 始教と終教

ここにいう華嚴三性說とは、所謂、唯識法相教學で說くものとは異る賢首大師法藏の三性說についてである。遍計所執性、依地起性、圓成實性の三性說と言えば、本來唯識教學獨自の教義である。勿論、唯識教學自らの教理發展の中に、その內容の變化が見られるが、それ以外の教學の中には見出し得ないのである。然るにこの教學の三性說を華嚴教學に受容し、教義內容を異にした構造を以て、法藏が自己の教義に重要な位置を與えたことは、特に注意せしめられる。一體、法藏はその著述の如何なる場所に、この三性の問題を取扱つているか。それが如何なる意圖の下に受容されたのであるか。更にそれは如何なる思想根據に立つているか。このような課題が當面の關心事となつて來る。

われらが最も纏つた形で、法藏の三性說を知り得るのは、『華嚴一乘教分記』[1]所謂『五教章』中卷の「三性同異義」である。また『十二門論宗致義記』[2]上卷に於ても、「二諦中道」の解釋を爲すところにこれを見る。更に、『探玄記』に於ては、整つた形ではないが、屢々散說されていることを知る。從つて主要なものは、古來からよく知られ、多くの解釋を生んだ『五教章』に於ける「三性同異義」ということが出來る。われらがここに扱う三性說の立場というも、この『五教章』に表われた法藏の立場に重點が置かれるのである。この「三性同異義」に關しては、內容的には今更、論議を必要としない程、從來多く研究が行われており、凝然の『五教章通路記』[4]の如きも、その代表的なものと言える。しかし、教理展開の跡付けの上には、問題は依然として殘つている。改めて新たな見地から檢討する必要に迫られるものがある。

先ず法藏の教判に於て、大乘始教と終教との判別の意義が問題となる。『五教章』に於ては、「義理分齊」の名の下に「三性同異義」が論ぜられているが、それは「上卷」に於て五教々判の確立が爲されて、その後に述べられているのである。五教判は、法藏が佛一代の所說を見る根本的な基準であり、簡潔であるが、そこに法藏の苦心が見られる。而して最も注目に價するものが、始教と終教との教理的判別とその關係であると言つてよい。圓教は勿論法藏の華嚴の最後的立場であるが、ここに到る途として、始教と終教との區別と關係とが明かにならなければ、それは基礎のない教理に終つてしまうのである。それ故に法藏の努力をこの始教と終教の中に見るということが、同時に三性說の立場を知る上にも最も重要であると言える。始教と終教との教理的區別は、直接的には唯識法相教學と如來藏緣起に立つ教學とである。從來言われて來た大乘相宗と性宗ということになる。この問題は法藏の時代を念頭に置けば、佛教の歷史的意義を負うている。卽ち唯識法相學の隆盛期に於て、法藏が性宗卽ち終教を、相宗卽ち始教より優位に見ていることである。われらはこの點に關しても、注意深く問題を追求せねばならない。法藏は故意に始教の教理的意義を低からしめたのであろうか。從來、稍々もすればそのような觀點から、法藏に對する批判が爲されて來た。しかし、後に明かにするであろうが、法藏の所說を檢討すれば、そうした意識的なものは見出されない。法藏の意圖するところは、佛教々理を矛盾なく一貫して受容し、その教理的關係を明かならしめることに全力が注がれている。法藏は確かに終教の立場を重んじた。それは一面に於て如來藏緣起思想が、特に中國に於て要求されたことを代表するものであると言つてよい。唯識法相教學が價値低きものであると言うのではなく、唯識法相教學と並行して、如來藏緣起思想が強く擡頭して、それが法藏に至つて頂點に達したと見ることが出來るのである。

このことに關しては、中國佛教に於ける如來藏緣起思想の展開を見なければならなくなる。われらは如來藏緣起系統の一群の經論によつて、中國佛教は自ら內なる要求と共に、如來藏緣起思想が自然に强く大を爲したことを忘れてはならない。このことにここでは深入りすることは避けねばならぬが、そこに時代的に見て、法藏の立場の位置も見逃してはならない。唯識法相教學は『成唯識論』に於て、法相教義を完成したのであるが、それは法相としての完成であつて、他面、自ら缺くるものがあつ

た。その一面を滿たすものが、如來藏緣起思想である。相宗と呼ばれ、性宗と名づけられて來たもの、何れも佛教々理として重要である。その始終二教を如何にして一佛教體系中に見究めてゆくかが、法藏の努力と苦心とであつた。出來上つた教理への批判は後世如何樣にもあれ、その組織を與えた意義を明かにすることが大切である。『楞伽經』『起信論』等の影響の下に、法藏が終教を强調せざるを得なかつた所以のものを卒直に認めねばならない。「三性同異義」についても、このような面から考察しなければならない。

二　空有相破相成

始教と終教との關係は、法藏が佛教全體への矛盾なき統一の念願から明かにしたものであることは、「三性同異義」の中にあまりにも强く表われている。それは印度大乘佛教の二潮流の矛盾を如何に見るかと言うことである。性相融卽とか、性相融會と言われるようなことが何故に爲されたのであるか。そこには唯識法相教學を拒否して、ただ如來藏緣起、卽ち性宗をのみを立てんとしたことは、どこにも見出されない。しかも、唯識法相教學の最重要教義としての三性說の內容に關する場所に、この問題を以てしたことは性相永別にのみ立つて、自ら孤壘を守ることに終る立場とは、全く立場の相違を見るのである。

殊に依他起性について論ずるところに、印度に於ける中觀、瑜伽の二派の論爭に關して、極めて適切な批判が爲されていることは、法藏の立場とその念願とを明了に示すものである。

④問若由依他有二義故。是故前代諸論師各述一義融攝依他不相違者何故後代諸論師如清辨等各執一義互相破耶。答此乃相成非相破也。……以色卽是空清辨義立空卽是色護法義存二義鎔融擧體全攝。若無後代論師以二理交徹全體相奪無由得顯甚深緣起依他性法。是故相破返相成也。

これ諸法緣起について、空有兩系の主張の矛盾なきことを、相破返相成の理を以て明快に論述したものである。卽ち前代と後代とを分けて、龍樹、無著、世親の教理自然發展の時代と、護法、清辨等對立論爭の時代とを擧げ、以てそれぞれの意義を認めているのである。このことは法藏にとつては極めて關心の深いものがあり、他の著書に於ても同樣の問題を取り上げている點、看過し得ないところである。このような空有相破相成の觀點に

立つ法藏は、三性說に於てもまた性相融卽を說くことに力を注いだのである。三性說は明かに唯識教學の教理である。しかも相宗が性相永別の立場に立つたに對して、法藏は性相融會の立場を以てした。卽ち空有相破相成の見地に立つた法藏は、そこから性相二宗の確執を排除して、大乘緣起甚深の理を貫通せしめた重大な意義を持つものと言わねばならぬ。徒らに統一融合の理を弄んだのではない。故意に矛盾の統一を計つたのでもない。そこには教理的に必然の理を內含していること見出したのである。三性說に於て、眞如を明かにする場所に於てこのことを顯著に知らしめられる。

三　眞如の二義

眞如について從來唯識法相宗の立場は「眞如凝然不作諸法」と批判されて來た。この說の根據は、華嚴法藏にありとせられている。

正しくこの說の出ずる箇所は『五教章』中卷の「三性同異義」と同下卷の「所依心識」とに於てである。この見解は唯識法相宗義としての眞如に關しての非難の如く解されている傾向があるが、果してそうであろうか。法藏の所說を詳しく考察すれば、決して法相宗の眞如に關しての立場を、不當な非難を以てしてはいない。このような教理的に重要な問題は、法藏の所說の內容を究め、正當な理解を持つことが必要である。法藏自らは一體どのように言つているであろうか。それよりも唯識法相宗の立場を明かにせる『成唯識論』に於ては實際如何に說かれているであろうか。

眞謂眞實顯レ非ニ虛妄一。如謂如常表レ無ニ變易一。謂此眞實於ニ一切位一常如其性故曰ニ眞如一卽是湛然不ニ虛妄一義。（卷第九）

この眞如の解釋から、直ちに眞如凝然という意味が生ずるか疑問の存するところであるが、同『述記』には、本來自性淸淨涅槃を說明する箇所に「凝寂湛然故無生滅」（卷第十末）という解說を見るのである。この凝寂湛然を略すれば凝然ということが出來る。從つて眞如凝然という言葉は、この邊に根ざすものと言えよう。法藏も亦この眞如不變の一義をとつて、眞如凝然不作諸法と言い表したものと察せられる。法藏は如來藏思想を自己の立場としているから、眞如不變の義と共に、眞如隨緣の義を必ず合せ說く。

さて『五教章』に於ては、法藏はどのように說明を與えているであろうか。眞如を凝然常と說く聖教の眞意を

追求して次の如く言つている。

⑦問諸聖教中並説二眞如一爲二凝然常一既不二隨緣一豈是過耶。答聖説二眞如一爲二凝然一者此是隨緣成二染淨一時恆作二染淨一而不レ失二自體一。是卽不レ異二無常一之常名二不思議常一。非レ謂下不レ作二諸法一而凝然上者是情所得故卽失二眞常一。以下彼眞常不レ異二無常一之常上不レ異二無常一之常皆出二於情外一故名二眞常一。

ここに言う凝然常とは、染淨と作つても、自體を失わざる意味であり、諸法と作らずして單に凝然なることは、情の所得であつて、眞常を失することとなる。卽ち情の所得というは、凝然常を固定的又は實體的に理解することであり、これでは佛教の本來的立場を失うことでもある。このような誤解は、情の所得であるが、凝然常というも、それが不失自體の意味ならば、誤つたことにはならないのである。それ故にこの過を防ぐために、法藏は實に巧みな表現をして、不レ異二無常一之常といい、それこそまた不思議常と名づくべきであると言つている。これ正しく情外のものであり、眞常というべきである。かくして眞如を常と言う場合、それは凝然常（不失自體）、不レ異二無常一之常、不思議常、眞常と言葉を盡してその眞意を表わさんとしているを見る。

更にまた『勝鬘經』の文を引いて、經意によつて一層この意を明かにしている。

⑧經中不染而染者明二常作二無常一也。染而不染者明下作二無常一時不ヤ失レ常也。（「自性淸淨章」取意）

この經文は、不レ異二無常一之常が自體を失わざることを明了ならしめていると見て、擧げたのであるが、法藏は同時に他面、不レ異レ常之無常をも明かにしている。卽ち『楞伽經』の如來藏や『起信論』の自性淸淨心についての文を取つて、不レ異レ常之無常の意味を述べている。換言すれば、ここから眞如隨緣の義を導き出しているのである。まことに法藏の眞如についての解釋は周到である。眞如を不變の一義のみに限定して説く時、それが情の所得によつて單に凝然と理解されることを警戒している。『成唯識論』や、その『述記』卷に於ても、かかる情の所得としての眞如を説くのではない。湛然不虛妄義とか、凝寂湛然故無生滅と言われたことも誤りではなく、眞如不變の義を强調したことによるのである。しかし法藏の立場は、他面、眞如隨緣の義を特に强調した。このことに關しては法藏の思想の背景があることを念頭におかねばならない。前に一言した『五教章』下卷に於ける

「所依心識」を説明するところに、

[9]若依二始教一於二阿賴耶一但得二一分生滅之義一以下於二眞理一未レ能二融通一但說中凝然不レ作二諸法一故就二緣起生滅事中一建二立賴耶一。

と言つて、『解深密經』等に依る唯識法相教學の立場を説いている。ここにも明かに凝然不作諸法の語が出ているが、それは阿賴耶建立の立場は、生滅の義の一分にあることを正當に理解していることであつて、唯識法相教學に對する非難ではない。眞如（ここでは眞理）に關しては、隨緣の義を表面に説かず、不變の義を説くのみであることを明了に述べているのである。從つて唯識法相教學の立場を枉げて見ているのではない。それ故に法藏の言う眞如凝然不作諸法ということも、情の所得で理解しなければ誤つた解釋ではないのである。要するにここでも初教と終教との立場の相違を明かにして、そこに教理的限界を巧みに表現したものと見ることが出來る。

四　眞如隨緣の義

眞如不變の一義にのみ立たない法藏が、特に隨緣の義を强調して眞如の實體視を避けたことは、最も注目すべきことである。而して華嚴三性説の立場を知る根本的課題がまたこの隨緣思想にあると言つてよい。一體、眞如隨緣の思想は、中國佛教に於て强まつた思想であり、それを明確に主張した者が法藏であると見られる。その根據は『大乘起信論義記』（中卷）である。そこには「[10]眞如有二二義一」と明言し、一、不變の義、二、隨緣の義と述べ、心眞如門、心生滅門に關しての説明を與えている。この眞如不變、隨緣の立場は、法藏の思想全體を動かすものであると言える。しかし法藏のみが獨りこの立場に立つたのではない。尤大な華嚴教學の體系を樹立したが故に、それが法藏の創説の如く見られたのである。確かに法藏の思想の基本を見る爲には『大乘起信論義記』が重要である。それ故にまた『起信論』研究の傳統を知る必要を生ぜしめる。中國の歷史を溯れば、曇延の『義記』に於て、既に[11]隨妄流轉の言葉を見出し、[12]一、本性淨心、二、隨緣用心の二義を以て、眞如の二義を明かに説くを見る。また慧遠の著と傳えられる『義疏』（上の下）には「[13]不生不滅體常住、隨緣成妄」と言つて「與生滅和合隨緣令和合……明隨妄義」と説き、更にまた海東の元曉は[14]その『疏』（上）に隨緣流轉と説き、『別記』には「[15]隨無明緣、流轉生死」等と解釋を與えている。これらの解釋を見るとき、既に法藏以前に法藏の背景となつている眞

如隨緣思想の流れを見出すことが出來るのである。それが法藏に至つて具體的に教義上明確な定義が與えられたのである。またそのことが法藏の華嚴教學の全體に影響して、思想的基礎となつたため、そこに法藏をして眞如の二義を創唱したかの如くに見られ來つたのである。

『五教章』「三性同異義」を以て代表せる華嚴の三性說の立場も、このような法藏の眞如についての獨特な思想から見なければ理解し得ないのである。端的に言えば、眞如の二義が華嚴三性說を動かしているとも言える。卽ち特に眞如に隨緣の義を認めたところから三性說に對する立場が、唯識說を用いつつ、異つたものとなつて來たのである。『大乘起信論』のみに止らず、唯識諸論の教義內容にまで歩を進め、そこから自己の教義を組織づけんとした試みが、また華嚴三性說であつたのである。それが前述の教判と直ちに結びついて、華嚴教學にのみ見出し得る異つた立場の三性說が成立したのである。一體、法藏の華嚴教學は、教理的には唯識法相教學に負うている面が極めて大である。それは『五教章』のみならず、『經』の註釋書としての『探玄記』等の中にも、その傾向を强く見出すことが出來る。今、この三性說に關しても、本來唯識教學に說く形をそのまま受け繼いでいるのであるが、立場の相違から同じく三性說であつても唯識三性ということは不可能である。唯識三性說を變形せしめて、自己の教理に再生せしめたと言うことでもない。唯識教學に負いつつ、その教學を再建し直すのではなく、所謂大乘緣起思想を彼の立場から統合することであつた。從つて『攝大乘論』や『成唯識論』等に見られる識の分別に精緻な教理を法藏のそれには見ることは出來ない。自ら目的を異にしていると言える。寧ろ唯識三性說を諸法を認識する教義的據り所として、龍樹以來の空有兩系の緣起思想の統一を企てたと言つてよいのである。彼の著『十二門論宗致義記』に於ては、龍樹の二諦中道說を唯識三性說によつて解釋した事實も、一應かかる要求からの所產と言い得るのである。それが『五教章』に於ては、最も具體化したのである。かかる意味から大乘佛教の思想發展の經路を、逆に見て先ず直接的には法藏の教學の對象となつたものは、唯識思想であり、そこから般若系の空思想に溯り、空思想の根柢に依つて改めて唯識思想を究めるというような方法を用いていると見られるのである。而して、この空有兩思想を矛盾なく領受する自己の思想根據は、如來藏緣起思想においたのであ

る。このような立場からこそ『三性同異義』は、その中心を貫く問題が「眞妄」ということにあることが歴然として來るのである。

五　三性の名の次第

三性說の全體を貫いて、眞妄の義を以て、組織づけたことは、法藏の思想的立場の特異性を示すものであると言つてよいと思う。殊に「梨耶眞妄」の論議に關しては、法藏に至るまでに中國佛教緣起思想の展開に歴史的意義を與えて居り、『地論』『攝論』等各々自己の見解を守つて主張し、歴史的な役割を果して來たのである。かかる歴史を背負いつつ、特に『楞伽』『起信』の影響を直接强く受けた法藏の立つ教理的立場が如何なるものであつたかは、「三性同異義」の說かれている冒頭に於て顯著に知らしめられるのである。

われらは先ず三性の名を說く次第順序が唯識の諸論のそれと異つていることに留意せしめられる。唯識教學の流れに於て古く組織的に三性說が說かれているのは『攝大乘論』であるが、この『論』では、三性は、依他性、分別性、眞實性（眞諦譯）の順序を以て、三性各々の名の定義が與えられ、そこから詳細にその意味、相互關係が明かに論ぜられているのである。また他に世親の『佛性論』[17]には、分別性、依他性、眞實性の順を以て說いていることを知る。更に唯識法相教學の大成された『成唯識論』[18]に至ると、遍計所執性、依他起性、圓成實性という順序を以て三性說の完成された形を示している。一體三性說の教理的內容を究明すれば、新舊兩譯の間にそれぞれ特徵があり、同じ唯識教學の系統の中に於ても、微妙な立場の相違が現われて居り、それによつてまた教理發展の經過をも窺うことが出來るのであるが、今ここでは印度に於て創唱された唯識三性を說く諸論の何れの形とも異つて、三性の名は同じうするも、その說述の方法と順序とが變つていることを知る。三性の名が唯識教學のそれと同樣に用いられていることによつて、その說述の順序次第を看過すれば、ここでは却つて三性を說く根本的立場をも見失うことになる。それ程ここでは三性の配列の順序が問題とされてよいと思う。卽ち三性の名の配列の順序が、直ちに三性を說く思想的立場と關連しているからである。勿論、同一人法藏の著である『十二門論宗致義記』と『五教章』とは三性を說く順序が異つているから、三性の說述の順序の如きは問題とする必要がないという見解も生ずるであろうが『十二門論宗致義記』

に於て、依他起性、遍計所執性、圓成實性の順序を以て解釋が爲されていることは、『論』の內容の展開に從つて「二諦中道」を說明する必要の上から、この順序を以て解釋したのである。『五敎章』「三性同異義」に於ては、全く事情が異つている。ここでは『起信論』の眞如、如來藏思想が根本をなして、華嚴一乘への敎理展開が意圖されている。そしてこの立場が諸法を認識する自己の確信として現されているのである。從つて唯識諸論に見られる三性の次第とは全く順序を逆轉させて、「眞（眞如、圓成實性）、依他性、遍計所執性」という配列に變つて、その同異の說明が爲されている。このような順序は實に珍らしい形を示したもので、これのみで以て、唯識的立場とは自ら異ることを窺い知ることが出來る。卽ち「識」に中心がおかれるのではなくして、眞と妄との關係に重要性を見て、それを明かにする爲に三性が說かれているのである。これは正しく『大乘起信論』に於て、心眞如門、心生滅門が次第に說き起されている方法と同じ形をとつていることを知らされる。而してその敎理的說明の仕方に於ても、最初から直ちに「眞中に二あり」として不變の義、隨緣の義の二義を以て解釋しているのである。法藏は眞、或いは眞如と言つて、唯識諸論の眞實性（舊譯）とも圓成實性（新譯）とも言わず（「圓成實」の名は後に出し、新舊兩譯を自由に驅使しているが）眞中の二義が最初から三性を見る基本であることを知らしめる。

彼は『大乘起信論義記』（中卷）に於て、

眞如有二二義。一不變義二隨緣義。無明亦二義。一無體卽空義二有用成事義。此眞妄中各由二初義一故成二上眞如門一也。各由二後義一故成二此生滅門一也。

と說いて、眞妄の二義を明かにしているが、この立場をそのまま三性說に用いていることが知られる。かかる觀點からすれば、三性に各々二義を見る「三性同異義」に於ては、唯識の諸論に於て組織づけられた三性說の方向と異つて『起信論』の思想を根柢とし、說述の形式もまたそれに依つていると見ることが出來るのである。ここでは三性の相互關係の複雜な解釋はなく、ただ三性の同異という面から、各々二義を知ることによつて簡明に理解する方法が取られたのである。このような方法を以て三性を說くことには、唯識三性を法藏が變質せしめたという批判も生じるであろうが、法藏の立場と意圖する目的が異つているから、唯識三性說を受容しながら、自己の思想から極めて一貫して矛盾なく理解したのである。故意に變質せしめたのではなく、このような理解の仕方

が、自己の思想的立場から自然に爲し得れたのであろう。

六　眞妄觀

唯識教學に於て、三性の相互關係を說く場合は、屢々「蛇繩麻」の譬喩が用いられる。この譬喩は『攝大乘論』に於ては、蛇、藤、四塵（眞諦譯）或いは、蛇、繩、四塵（玄奘譯その他）が說かれ、後には「蛇繩麻」の譬喩と言われ、よく知られているところであるが、法藏は「三性同異義」に於ては、この譬喩を用いていないのである。唯識觀として用いられるこの譬喩は、三性同異を說明するには必要としなかつたのであろう。譬喩としては、ここではただ所執性に關して「木杌と鬼」の譬喩を擧げて說明するに止めている。前にも述べた如く、法藏は眞妄觀に立つて、三性を同の面と異の面とを明かにしたのであるから、唯識觀卽三性觀の立場と解釋の相違を生じ、「蛇繩麻」の譬喩もここでは用いる必要を感じなかつたであろう。自己の立場があくまで眞如（圓成實性）から出發しているため、三性の同と異と何れの義を見るにしても、それは眞中の不變、隨緣の二義から貫いて見ることが出來たのである。

また依他の二義卽ち、一似有の義、二、無性の義、更に所執の二義卽ち、一、情有の義、二、理無の義を說くことは、勿論直接的には『成唯識論』等の說に依るのであるが、この中、依他について唯識教學では識有の立場から說くのであるが、ここでは識については觸れずに、直ちに緣生の法を似有、無性の二義で以て說く。本來唯識教學に於ては、依他を說くことが最も重要な意味を持つている。依他が識有に於て認められなかつたならば、唯識三性說は成立しない。殊に『攝大乘論』に於て詳說されている依他の諸相は、甚深の意味を藏している。『攝大乘論』のそれが依他中心の三性說と言われ、更に『成唯識論』が同じく三性を說く場合、遍計所執性に新たな追求を爲していることは、それぞれの特徵を示している。これらの特徵は今の華嚴三性說の立場と共に三性說の教理發展の上に深く關心をそそるものがあるが、法藏に於ては『攝大乘論』の思想影響を强く受けつつ、依他を說くに種子識の問題にも觸れていない。この點からも所謂唯識觀を說く爲ではなくして、諸法を眞妄の關係に於て究明することが直接の主要な意圖であつたことが知られる。

この眞妄觀を徹底せしめることが、三性各々に二義を

認めることによつて明了になつたのである。「三性一際にして無異なること、及び三義不一なること」が法藏の直接强調するところである。即ち「眞該二妄末一妄徹二眞源一性相通融無障無礙」という透徹明快な說述は、唯識教學とは異る獨特な眞妄關係を明かしたものである。性相融即、理事無碍の思想は、この穿つた言葉によつて、眞に躍如たるものがある。かくしてこの三性說は理事無碍の教義に內容を與えるものとなつた。この三性の解釋の內容を見れば、煩瑣な說き方はされていない。第一に三性各々を有無等の四句分別によつて、その一方的な所執を離れしめ、第二に一向有無等より生ずる過について、斷常の二過を分別して三性各々を明かにした。それ故に、法藏の立場によれば、三性は有無、斷常の過を離れたところに、本來各々二義あることが認容される。ここに於て法藏は有無、斷常の二過を檢討することに力を注ぎ、三性の眞意を自然に知る方法を用いたと言つてよい。ここでも眞如、依他については詳說し、遍計所執性に關しては、比較的簡略に解釋が與えられていることも、唯識法相教學の傾向とは趣を異にしていることが知られるのである。

「三性同異義」に於ける所引の經論に注意すれば『維摩經』『中論』『智度論』等般若空觀系の文が多く、一方また『涅槃經』『勝鬘經』『不增不減經』『楞伽經』『起信論』等如來藏緣起思想系統の文がこれに次いでいる。また直接的には『成唯識論』の三性說の影響を受けつつも、『攝大乘論』（眞諦譯）並に『釋論』を尊重し、その引文が多量である。所引の經論の文から窺われるものは、三性を三無性と表裏に見つつ、空有兩系の思想を如來藏緣起思想を以て、積極的に統一づけていることが知られる。般若空觀系の經論を多く引いていることも、法藏の思想的立場に連關して見逃し得ないものがある。しかし特に際立つて注意せしめられることは『攝大乘論』並に『釋論』の三性說を重要視していることである。實際、唯識系の『論』としては『攝大乘論』に最も親近していたことが明かである。これは『探玄記』等にも著しく現れている傾向であるが、『攝大乘論』が唯識思想を以て一貫しているに拘らず、その中に如來藏思想をも內含していると見ている。これは當時の『起信論』信奉研究者の一般的傾向でもあるが、法藏もその代表的な一人である。

「三性同異義」の最後に總說として「三性一際隨一一全收。眞妄互融性無二障礙一」と述べ、三性相互關係の不

離なることを明言して『攝大乘論』並に『釋論』の文を引いている。而して所引の文は、三性不離なることを說明するために、生死と涅槃、染汚と淸淨とが無差別なることを、依他性中に見出している。卽ち『攝大乘論』に說く依他性を重んじて、特に特徵とされる二分依他をここに受け、依他中、三性無差別の義を强調したのである。『攝大乘論』中に引かれている『婆羅門問經』の文、並に『阿毗達磨修多羅』の文によつて、前者は、依他性中、分別と眞實とは無差別、從つて分別性の一分に由つて生死を眞實性の一分に由つて涅槃を成ずると言い、また、後者は、世尊の說法に、染汚分、淸淨分、染汚淸淨分の三分が說かれ、順次にそれは、分別、眞實、依他の三性を說かれたものとされ、『釋論』では依他中、煩惱性と淸淨品の兩分を具するが故に、依他性は二性を以て性と爲すと言われている。このように『攝大乘論』並に釋論の文を最後に引用し、唯識三性說の特徵を示す二分依他性が、眞妄を中心として說く法藏の三性無障礙の說に據り所となつていることを知る。この二分依他性の說は、法藏が如來藏思想によりつつ、三性關係を明かならしめるに最も適切なものであつたと見られる。この『攝大乘論』の說から、法藏は自己の立場に移して、「眞該二妄未一相無レ不レ攝。妄徹二眞源一體無レ不レ寂。眞妄交徹二分雙融無礙全攝」という鮮かな表現を以て『論』文の意を汲みとつたのである。依他性二分無差別は、そのまま法藏に於ては、眞妄融攝と領解されたのである。

以上、華嚴三性說の立場について、それが唯識系の三性說と立場を異にする面を求めたのであるが、三性を成立せしめている教義內容、並に三性說の變遷等については、なお豐富な問題を孕んでいるが、ここでは、華嚴三性說の依つて立つ立場の解明のみに止めることとする。

註

① 華嚴五敎章卷第四（大正藏、四五、四九九）
② 十二門論宗致義記卷上（大正藏、四二、二一五）
③ 五敎章通路記卷第十九以下（大正藏、七二、四四四）
④ 華嚴五敎章卷第四（大正藏、四五、五〇一上）
起信論義卷上並に入楞伽心玄義にも同樣の問題を記している。
⑤ 新導成唯識論（三九二）
⑥ 成唯識論述記卷第十末（大正藏、四三、五九六中）
⑦ （大正藏、四五、五〇〇上）
⑧ 如來藏五義の後に出ずる文。取意にして、法藏はこの取意の文を屢々用う、
⑨ （大正藏、四五、四八四下）

⑩ 大乘起信論義記中卷（大正藏、四四、二五五下）
⑪ （續藏、七一套、第一輯、二七一、左上）
⑫ （同、二七三、左上）
⑬ （大正藏、四四、一八二下）
⑭ （同上、二〇九、下）
⑮ （同上、二二七下）
⑯ 攝大乘論卷中、應知勝相品（眞諦譯）
（大正藏、三一、一一九中以下）
⑰ 佛性論、顯體分、三性品（同上、七九四以下）
⑱ 新導成唯識論（三六七）